



※本系図は太田亮博士「皇室御系図」(『姓氏家系大辞典』)などによる。

・ 25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。

正・18 御会始。公宴御会和歌。正・25 聖廟、この時の院の御製は「網代」と題された一首である。3・15 石清水臨時祭がこの日天皇によつて再興される。これに天皇は力を盡されたが、上皇のご贊同を経てきたからという。(11)・3 上皇は、七十四歳をもつて崩御される。十二月七日、泉涌寺に葬り奉る。12・22 後桜町天皇七々忌を光格天皇は、百八遍の光明真言を書きし供養される。その導師は後桜町天皇の兄弟で、当時青蓮院門主の尊眞親王であつた。

(113)『列聖』に「ゆたかなる世とは知られて咲き匂ふ桜をかざす春のもろびと」がある。

(114)『列聖』にみえる後桜町院最後の御製である。「梅有色香」と題して「春きぬと咲くやこの花いろも香もこと木にめぐむ始なるらむ」がある。

(115)『宸翰英華』(二四九七八頁)、「一六五宸翰御短冊」(東山御文庫御物)、「もろ人の袖さむからじあじろ木による木のはもこほる河かぜ」とある。聖廟

(北野宮)御法楽の御製といふ。後桜町女帝は、このほか後鳥羽院と菅原道真公を慕われたのか、その忌日(後鳥羽院は延應元年(一二三三九)二月十二日崩御、道真公は延喜三年(九〇三)二月十五日薨去)には、かならず法楽和歌を作つておられる。歌人としてのお二人を慕われたことに加えて政治的に非運な生涯を終えられたことを深く嘆かれての顯彰であろう。後桜町女帝のお心を示していて興味深い。

(116)『宸翰英華』(二、五二〇)一頁 光格天皇の「二一八九宸筆御沙汰書」(東山御文庫御物)によると、石清水八幡宮と賀茂両社の臨時祭は、ながく廃絶していたが、その再興を天皇は願つておられた。これは、既に桜町天皇の御時に計画がおこされていたものである。そして、このことは後桜町上皇も、とくに賛同しておられたこと、いう。この日(文化十一年三月十五日)、ついに石清水社の方は再興された。しかも、賀茂社の方も文化十二年十一月二十二日再興を見ることになる。光格天皇は、このよう朝儀の廢絶をなげかれ、その復興に力を灌がれたのである。

文化七

(八〇・七)

としたといい、天皇による御賀の会が催されたことがわかる。

(108)『列聖』に「神垣の松にしらゆふかけてしも仰ぐめぐみは千とせよろづ代」がある。

12・22 水無瀬。12・25 聖廟。
正・18 御会始なり。院、「心静酌春酒」と題する御製一首あり。

※正・24 内裏御会始。内裏和歌御会。

この年、二月、四月、五月、六月、七月、九月、十月、十一月、十二月の十八日に各二首の院の御製あり。

文化八

(八一・七)

正・18 御会始。2・22 水無瀬。2・25 聖廟。

※(2)・7 内裏和歌御会。

(2)・22 水無瀬。(2)・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会あり、「翫桃花」の題で院の御製一首あり。これは、二日前の十六日元服された惠仁親王(12歳、光格天皇皇子)のことを詠まれた。さらに、この日もう一首の御製「水辺松」と題されたものがある。これは、四十年余りを仙洞御所で過ごされたの詠である。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。

文化九

(八一・七)

正・18 御会始。

※正・27 内裏和歌御会。

2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。3・22 水無瀬。3・25 聖廟、この時の院の御製は「桜」と題された一首である。4・22 水無瀬。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7

(109)『列聖』に「かぞへそふ老を忘れてゆたかにも若がへるはるの霞をぞ酌む」がある。

上皇の御賀がなされたことがわかる。

(110)『列聖』に「いはふぞよ三千世の桃の花もしけ初もとゆひの春まちえつ」がある。『本朝胤紹運録』(四八六頁)によると惠仁親王は、「文化四年七月十八日為中宮御實子。為御繼体奉稱儲君。九月廿二日親王宣下。御年八歳。同六年三月廿四日立太子節会。奉稱東宮。同八年三月十六日御元服。御年十二。……」とあり、この三月十六日に元服されたのである。上皇もさぞやうれしかったことであろう。光格天皇の即位をみちびき、ご教育をされたのであるから、その喜びは、一人であつたろう。ちなみに、この惠仁親王こそ仁孝天皇である。

(111)『列聖』に「よそぢあまりなれ見る洞の池の松みづの鏡にかけをうつして」とある。上皇としての自らを、このよろこびの日に感懷をこめて詠んでおられる。

『列聖』に「竹契週年」という題で「ならひつ、千代も契らむ吳竹のなほきすがたを人のこ、ろに」がある。上皇は、人は「吳竹のなほきすがた」を心としていくのが望ましいと詠んでおられる。

文化 五 <small>(一八〇九・⁶⁹70)</small>	正・18 御会始。	と題する院の御製 ⁽⁹²⁾ あり。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10
文化 六 <small>(一八〇九・⁷⁰71)</small>	※2・3 内裡和歌御会。	・22 水無瀬。10・25 聖廟、この時の院の御製 ⁽⁹³⁾ は「戀硯」と題された一首がある。11・22 水無瀬。11・25 聖廟、この時の院の御製 ⁽⁹⁴⁾ は「松」と題された一首がある。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。
文化 六 <small>(一八〇九・⁷⁰71)</small>	2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。3・22	2・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5
文化 六 <small>(一八〇九・⁷⁰71)</small>	水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5	・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。⑥・22 水無瀬。⑥・25 聖廟。7・22 水無瀬。7
文化 六 <small>(一八〇九・⁷⁰71)</small>	正・18 御会始、題「寄松祝言」に院の御製 ⁽⁹⁵⁾ 一首あり。	25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。12・25 聖廟。
文化 六 <small>(一八〇九・⁷⁰71)</small>	※2・3 内裡和歌御会。	9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟、この時の院の御製 ⁽⁹⁶⁾ は「春朝天」と題された一首である。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟、この時の院の御製 ⁽⁹⁷⁾ は「松」と題された一首である。12・14 上皇、七十御賀和歌あり。また、禁中にて舞樂あり、殿上人をもつて舞人

は軒端の荻のゆふかぜの声」がある。

(97) 『列聖』に「田家」と題して「うれしとや民のこゝろを思ひやる稻葉いろづく千町田のあき」、「祝言」と題して「たまほこの道のひかりを敷島の大和ことばにあふぐよろづ代」がある。

(98) 『列聖』に「洞の池にすみなるる亀のよはひこそいまゆくすゑも萬代の友」がある。「洞の池にすみなるる亀」とは仙洞御所におられる上皇ご自身のことをおられておられ、天皇の御代のゆくすえを考えての御製である。

(99) 『列聖』に「すぐなるをこころの友と栽ゑそへて明暮あかぬ園のくれたけ」がある。上皇は「すぐなる」心、素直な心の大切さをよく竹にたくして詠んでおられる。(注93・94)の歌も参照。

(100) 『列聖』に「名にたかき最中の月のかつら河てりそぶ影は世々にくもらじ」がある。

(101) 『列聖』に「社頭雪」と題して「幾千代と君をまもりのしるきかな北野の松につもるしらゆき」がある。

(102) 『列聖』に「なが月の名にしあひたる白菊の花のさかりは千代もつきめや」がある。

(103) 『列聖』に「見ても知れかきつくしたる言の葉にすずりの海のふかき思は」がある。

(104) 『列聖』に「あふぐより恵かさねて神垣のまつ木の松ものどけさぞ知る」がある。

(105) 『列聖』に「くもりなくむかふ心もゆたけしな朝日のどかにうち霞むそら」がある。

文化三			
(一八〇六・六七)			
正・18	御会始、題「亀萬年友」の院御製あり。	7・18	題「荻」という院の御製あり。7・22 水無瀬。7
※2・13	禁中當座御会。内裏和歌御会。	2・18	「園竹」という題の院の御製あり。
2・22	水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。	2・22	水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。
3・22	水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	3・22	水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。
25	正・18 御会始。	25	正・18 御会始。
25	※正・27 内裏和歌御会。	25	※正・27 内裏和歌御会。
25	2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。	25	2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。
25	3・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	25	3・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。
25	聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・18 「菊」	25	聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・18 「菊」

(86) 『列聖』に「松千春友」と題して「つきせじな千代十かへりの花も見む松を友なる洞のうちの春がある。」

(87) 『列聖』に「みよながくやはらぐ春のたちかへり言葉の花も更にさかえむ」とある。

(88) 『列聖』に「神わざのことをあまたの君が代ゆたけさ知れと雪や積らむ」とある。

(89) 『列聖』に「萬物感陽和」と題して「大空のかすみ立つより草木にもおよぶや春のめぐみなるらむ」がある。

(90) 『列聖』に「朝」と題して「朝な朝な心のかがみかきそへて祈るまことは神や知るらむ」がある。

(91) 『列聖』に「雪」と題して「あふぐこの神の宮居の松たかく降りつむ雪も千代のいろかな」がある。

(92) 『列聖』に「寄鶴祝」と題して「玉敷の庭の眞砂を踏むたづはげにいくかへり千代もへぬべし」がある。さらに御代のながからんことを思つておられるのである。

(93) 『列聖』に「すぐなるを心の友とならひ見るまがきの竹のさかえゆくかげ」がある。

(94) 『列聖』に「竹契萬齡」と題する「色をそふ竹のよろづ代いかへりかさねむ洞の春ぞひさしき」がある。

(95) 『列聖』に「河」と題して「水無瀬がありて行くせの霞こそ昔のはるを見せて立つらめ」がある。これは、後鳥羽院の「見渡せば山もと霞むみなせ川夕ベは秋と何思ひけん」(『新古今和歌集』卷第一春歌上)が下敷きになつてゐるのである。

(96) 『列聖』に「秋きぬといふよりやがてさびしき

文化二		文化元		享和三		正・18 御会始。		享和二		正・18 御会始。	
(一八〇五) 66	聖廟。	(一八〇四) 65	聖廟。	(一八〇四) 64	聖廟。	2・22 水無瀬。	2・25 聖廟。	2・22 水無瀬。	2・25 聖廟。	11・22 水無瀬。	11・25 聖廟。
聖廟。	11・22	水無瀬。	11・22	聖廟。	12・18	院「松辺千鳥」	と	聖廟。	10・25	聖廟。	11・25
※正・27	御会始。			いう題の御製あり。 ⁽⁸⁸⁾	12・22	水無瀬。	12・25	聖廟。			

計にては、つい心もたるみ候事、か様に仰有レ之候へば、其度ごとに心もすゝみ、実くくくく有がたきく事、とかく人は身勝手に成安き物、……仰之通身の欲なく、天下萬民をのみ慈悲仁恵に存候事、人君なる物の第一のおしへ、論語はじめあらゆる書物に皆く此道理を書のべ候事、則仰と少しもくちがいなき事、扱くく添くくくくくく存じまいらせ候。……とかく折くは仰いたゞき候事、はげみに成実くくくくくく御うれしく添くくく存まいらせ候。……仰之通何分自身を後にし、天下萬民を先とし、仁恵、誠信の心朝夕晝夜不忘却時は、神も佛も御加護を垂給事、誠に鏡に掛て影をみるがごとくて候。……御厚意御念比之御書付實にくく有がたくくく存まいらせ候。：

この御消息文には、上皇と天皇との間の親しさも垣間みられ、天皇といふものあるべき姿について常々上皇よりこのように伝えられていたことがわかり興味深い。

(84) 『列聖』に「松積年」と題して「さかえ行く言葉の道のいく千代とみなせの山の松は知るらむ」がある。

(85) 『列聖』には、「この杖の竹のとせも君が手にまかせてこえむ齡とぞおもふ」とある。「君が手にまかせて」には、即位二十年がたち、二十九歳の天皇に今後をまかせるというお気持がよみとれる。この日六十御賀により堂上舞楽があつた(本朝皇胤紹運錄)。

寛政 十二 <small>(二七九九 60)</small>	正・18 御会始。2・22 水無瀬。2・25 聖廟。 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。	11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。
寛政 十一 <small>(一八〇〇 61)</small>	正・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・23 上皇 <small>(60歳)</small> からご教訓の あつたことに対する天皇 <small>(29歳)</small> の返書 <small>(83)</small> あり。7・25 聖廟。 8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11 ・26 上皇、六十の御賀に、御杖につけて御製 <small>(84)</small> あり。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・23 上皇 <small>(60歳)</small> からご教訓の あつたことに対する天皇 <small>(29歳)</small> の返書 <small>(83)</small> あり。7・25 聖廟。 8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11 ・26 上皇、六十の御賀に、御杖につけて御製 <small>(85)</small> あり。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	正・18 御会始。 ※正・24 禁中御会始。内裡和歌御会。2・3 禁中御 當座。内裡和歌御会。3・21 禁中御當座。内裡和歌 御会。
寛政 十二 <small>(一八〇〇 62)</small>	正・18 御会始 <small>(2・5 改元)</small> ※正・27 内裡和歌御会。	正・18 御会始。 ※正・24 禁中御会始。内裡和歌御会。2・3 禁中御 當座。内裡和歌御会。3・21 禁中御當座。内裡和歌 御会。	2・10 改元後、「立春」と題して院の御製 <small>(87)</small> あり。2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。 5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8

(79) 『宸翰英華』(二) 四九四頁「一一六〇 宸筆御短冊」(住吉神社藏)。

(80) 『列聖』に「雪中梅」と題して「ふりつもる雪に匂ひてしろたへの色みえまがふ梅のはつはな」、「月契秋」と題して「いくかへりつきぬ契はひさかたの空にてりそふ秋の夜のつき」「浦船」と題して「すみの江や千代まつ風も音そへて波路ゆたかに出づるうら船」がある。これに続く「曙花」という題で「たぐひやは有明のかげもほのぼのと霞みあひたるはなの梢は」、「雪」という題で「みがきそふ雪のひかりも玉津嶋こほる入江のなみにかさねて」、「逢夢戀」という題で「逢ふと見て覚めぬる床におもかけののこるはつらき夢の通路」の三首を『列聖』は住吉社御法楽歌としているが、『宸翰英華』(二)では、玉津島神社へ法楽されたとしている(同書四九四・五頁「一一六一 宸筆御短冊」(玉津島神社藏))。

(81) 『宸翰英華』(二) 四九五頁「一二六二宸筆御短冊」(島根県柿本神社藏)。三首の御製あり。

(82) 『列聖』には「水無瀬宮御法楽」とあるが「聖廟御法楽」のあやまりであろう。年譜には「聖廟」とする。

(83) 『宸翰英華』(二) 五五一・六頁。「一二三三七宸筆御消息」(京都御所東山御文庫藏)に次のごとき一節がある。

(上皇の) 尤仰之通、人君は仁を本といたし候事、古今和歌漢文書物にも数々有り之事、仁は則孝、忠、仁、孝は百行の本元にて、誠に上なき事、常々私も心に忘れぬ様……とかく自身

寛政 八
(二七九六・⁵⁷)

2 . 22 御会始。(女院崩御により正月なし)
水無瀬。2 . 25 聖廟。

※2 . 28 内裡和歌御会。

3 . 18 神影供。月次御会。3 . 22 水無瀬。3 . 25 聖廟。

4 . 22 水無瀬。4 . 25 聖廟。5 . 22 水無瀬。5 . 25 聖廟。

聖廟。6 . 22 水無瀬。6 . 25 聖廟。7 . 22 水無瀬。7 . 25 聖廟。

聖廟。⁷³ 8 . 22 水無瀬。8 . 25 聖廟。9 . 14 上皇、

天皇(26歳)に三部抄御伝授あり。⁷⁴ 9 . 16 上皇より、彈正尹美仁親王に伊勢物語御伝授あり。その際、御伝授の日取り等のご都合お問合せの消息文⁷⁵あり。

※9 . 19 内裡和歌御会。

9 . 22 水無瀬。9 . 25 聖廟。10 . 22 水無瀬。⁷⁶ 10 . 25

聖廟。11 . 22 水無瀬。11 . 22 水無瀬。11 . 25 聖廟。

※12 . 18 内裡和歌御会。⁷⁷

12 . 22 水無瀬。12 . 25 聖廟。⁷⁸ 當座御会。

正・18 御会始。

※9 . 7 春日社御法楽。當座御会。内裡和歌御会。

9 . 15 上皇、天皇に古今和歌集の秘説を伝えらる。

※11 . 26 住吉社御法楽。内裡和歌御会。

寛政 十
(二七九七・⁵⁸)

正・18 御会始。2 . 22 水無瀬。2 . 25 聖廟。3 . 18

神影供。月次御会。3 . 22 水無瀬。3 . 25 聖廟。3 . 30

天皇の古今伝授のために、上皇、石見国柿本社にご報賽あり。その時、院の御製⁸¹あり。4 . 22 水無瀬。4 . 25

5 . 25 聖廟。6 . 22 水無瀬。6 . 25 聖廟。7 . 22 水

無瀬。7 . 25 聖廟。8 . 22 水無瀬。8 . 25 聖廟。

9 .

『宸翰英華』(二) 五〇六・七頁。「一一七
(74) 六 寅筆御消息」(閑院宮藏)に次のようにある。
(75)

伊勢物がたりでんじゅ之事、中下じゅん御さしつかえ無之候や。十四日御でんじゅすみまいらせ候。十六日比にも可^レ有哉。又は下じゅんか。内^{一脚文}かもんにて心あたり十六七かと存候。烏丸いづれ下じゅんと存候。そなたの事、中頃十六七存候へ共、中下のことは、ゑん慮なく内く承度候。書付候てと遅々候。烏下の方定候。

いかが哉と心づかいも可^レ有哉と、下を定、安心させ候心さしと、そなた必心つかひなく御申こし、その上にて上じゅんに日から治定と存候。御氣成承度候。此ほど冷氣御用心、こなた氣成少くの事候へしか、もはやよろしく候。詠草近々返進候べく候。かしく。

同書の解説(五〇七頁)にあるごとく、伝授の日取りのご都合を問合せられたものである。この月の二十二日には烏丸光祖にも同じく三部抄をご伝授されている。「冷氣御用心」など後桜町上皇のお気づかいがみられる。

『列聖』に「名所山」と題して「すべらぎをまさかえむ言の葉の花のいろそふ春はきにけり」がある。

(77) 『列聖』に「初春」と題して「千代かけて君に

さかえむ言の葉の花のいろそふ春はきにけり」がある。

(78) 『列聖』に「神祇」と題して「恵しるまことをまもるこの神のいがきの松のちとせよろづ代」がある。

寛政 五	正・18 御会始。	※2・6 内裏和歌御会。7・7 内裏和歌御会。12・
寛政 六	正・18 御会始。 ⁶⁷	22 内裏和歌御会。 ⁶⁸
寛政 七	※正・24 禁中御会始。内裡和歌御会。2・5 内裡和歌御会。	22 内裏和歌御会。 ⁶⁹
寛政 七	2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・6 中宮欣子内親王(後桃園天皇皇女)、七日に立後の儀を行うため、一時、上皇の仙洞御所へ退出し、再び十日入内までの間に、天皇より中宮への御消息あり。3・18 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。	2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・6 中宮欣子内親王(後桃園天皇皇女)、七日に立後の儀を行うため、一時、上皇の仙洞御所へ退出し、再び十日入内までの間に、天皇より中宮への御消息あり。3・18 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。
寛政 七	3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。	3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。
寛政 七	11・22 水無瀬。11・25 聖廟。⑪・22 水無瀬。⑪・聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	11・22 水無瀬。11・25 聖廟。⑪・22 水無瀬。⑪・聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。
寛政 七	正・18 御会始。2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。	正・18 御会始。2・22 水無瀬。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。
寛政 七	※8・28 禁中御當座。内裡和歌御会。	※8・28 禁中御當座。内裡和歌御会。
寛政 七	9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。11・晦日 女院(上)	9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。11・晦日 女院(上)

(67) 『列聖』に「洞庭松久」と題して「この春に千代のいろそふ洞の松つきぬ言葉のさかえ知られて」がある。「洞庭」とは仙洞の庭のことである。

(68) 『列聖』に「竹有佳色」と題して「いく千代と後垣の竹もいろや添ふ君がことばのさかえゆく春」がある。

(69) 『宸翰英華』(二)「二三九、宸筆御消息」(光格天皇(陽明文庫藏)五五八)九頁)に、「……仙洞様にも、御機嫌よく、ならせられ候。……誠にきのふは、立后もするゝとすみ、……猶ゝ十日にはめで度入内之事いかほどかゝ祝入候。早くく十日になり候やうにと、扱くまち入申候かしく」とあり、さらに、「君をのみ思ひまつらの浦舟のうきしづむ身の心しりてよ」とも仁)と記されている。この記、天皇御歳二十四歳、中宮欣子内親王十六歳である。

(70) 『列聖』に「池水長澄」と題して「千代の色をみぎりにたえぬ瀧の絲のながくもすまむ洞の池水」がある。

(71) 『列聖』に「春神祇」と題して「神がきに花のしらゆふかけそへて榮を千代といのることの葉」がある。

(72) 『列聖』の寛政七年の項に「十一月晦日依女院崩御十二月無御会」とある。ちなみに、この女院は後桜町上皇の御母青綺門院(藤原舎子)である。

(73) 『列聖』に「秋田」と題して「御代のめぐみうけて潤ふ秋の田の稻葉のつゆに民やたのしむ」がある。

			寛政二	正・18 御会始。 ⁽⁵⁹⁾
(二七九) · 51	寛政三	※正・24 禁中御会始。内裏和歌御会。2・8 内裏和歌御会。 ⁽⁶⁰⁾	※11・22 禁裏造営成り、天皇、聖護院仮皇居より還幸す。	
(二七九) · 52	寛政四	正・18 和歌御会始。 ⁽⁶¹⁾	2・18 和歌御会始。2・22 水無瀬。	
(二七九) · 53	寛政四	正・18 御会始。 ⁽⁶⁴⁾	法樂。2・25 聖廟。3・18 神影供。3・22 水無瀬。3	
		※2・4 内裏和歌御会。 ⁽⁶⁵⁾	・25 聖廟。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。7・22 水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12	
		※7・7 内裏和歌御今。 ⁽⁶⁶⁾	・25 聖廟。②・22 水無瀬。②・25 聖廟。③・18 神影供。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。④・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。6・22 水無瀬。6・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12	

(58) の花さく千代の色を見せてや春もつもるしらゆき」がある。

(59) 『列聖』には「春情處々多」と題して「春のいろに野辺も山辺も霞みつ、梅さく軒はうぐひすのこゑ」がある。しかし、この年はこの一首しか記されていない。

(60) 『公卿補任』第五篇、寛政二年項に、「(十二月廿二日還幸于新造内裏。」とある。

(61) 『列聖』に「竹樹有嘉色」と題して「榮えよとみどりの洞の松と竹なほゆくすゑの千代もこめつづ」がある。

(62) 『列聖』に二首御製がみえるが、そのうち「河月」と題して、「水無瀬川とほきその世の面影をへだてぬ月のすみわたるらし」がある。

(63) 『列聖』に「栽菊」と題して「うつし植ゑてかさねむ秋も長月や千代むすぶ露の白菊のはな」がある。

(64) 『列聖』に「子日祝言」と題して「洞の春につきぬためしや折にあふ今日の子の日の松の言の葉」がある。

(65) 『列聖』に「早春鶯」と題して「いとはやも春づげそめて神垣に鳴くうぐひすもよろづ代の声」がある。

(66) 『列聖』に「雪」と題して「ゆふしでに降りまがひつ、積るをも神やめづらむ杜のしら雪」がある。

			天明八	天明八				
			(七八八・49)	(七八九・50)				
聖廟。	10・22	瀬。	正・18	御会始。 (正・25 改元)	正・18	御会始。		
水無瀬。	12・22	水無瀬。	6・25	聖廟を假殿。 (青蓮院か)において行う。	6・25	聖廟を假殿。 (青蓮院か)において行う。		
水無瀬。	12・25	水無瀬。	7・22	禁中御会。内裏和歌御会。	7・22	禁中御会始。内裏和歌御会。正・27 内裏和歌御会。正・30 内裏炎上す。聖護院を天皇の仮御所とす。		
聖廟。	10・22	瀬。	7・22	水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・18 に御製あり。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	7・22	水無瀬。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。8・25 聖廟。9・22 水無瀬。9・25 聖廟。10・22 水無瀬。10・25 聖廟。11・18 に御製あり。11・22 水無瀬。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。12・25 聖廟。	7・22	水無瀬。8・22 聖廟。
寬政元	三七八九・50	瀬。	正・18	御会始。 (正・25 改元)	正・18	御会始。		
聖廟。	10・22	水無瀬。	2・22	水無瀬。	2・22	水無瀬。		
水無瀬。	12・22	水無瀬。	3・25	聖廟。	3・18	神影供。		
水無瀬。	12・25	聖廟。	4・25	聖廟。	5・22	水無瀬。		
聖廟。	11・22	水無瀬。	5・22	聖廟。	6・22	水無瀬。		
聖廟。	11・22	水無瀬。	6・22	聖廟。	7・22	水無瀬。		
聖廟。	11・22	水無瀬。	7・22	聖廟。	8・22	聖廟。		

(55) 上皇は、御所炎上の直後青蓮院を仮御所と定められたという。庭内にある好文亭(平成五年四月炎上、同七年再興)は、上皇の御学問所であるが写経や和歌会、お茶、お花など多目的に用いられた(東伏見慈治・横山健蔵両氏著『青蓮院』淡交社刊、八三頁)。こゝにみえる「假殿」とは青蓮院を指すものと思われる。

(56) 御所炎上の後、二、三、四、五月の詠がなく、この假殿でつくられたのが「めづらしな雪の花さく松の上におのが春しるうぐひすのこゑ」である。さはづる窓のうち雪の光をいくへそへても」がある。『列聖』に「窓」と題して「まなびえぬおろかる。学問を好まれた上皇の詠として意味が深い。

『列聖』に「春雪在松」と題して「この庭の松

			瀬。同・25 聖廟。9・22 水無瀬。同・25 聖廟。 ³⁹
天明四 (二七八四・45)	2・24	「若草」と題された御製あり。8・22 水無瀬。9・院より仙洞御所の御庭の紅葉について九条尚実に御製がつかわされる。 ⁴⁰ 11・22 水無瀬。同・25 聖廟。12・22 水無瀬。同・25 聖廟。	※この年、天明の大飢饉始まり、同七年に及ぶ。 ⁴⁰
天明六 (二七八六・47)	正・18	御会始。題「初春待花」の御製あり。	※この年、凶作による飢餓、京都でも静らす。 ⁴¹
天明七 (二七八七・48)	正・18	禁中御会始。内裏和歌御会。題「御苑鶯声」。	※正・24 禁中御会始。内裏和歌御会。 ⁴²
	同・28	内裏和歌御会。	『列聖』に「くもらじな世々にあまねく仰ぐこの北野の森の月のひかりは」とある。
	2・22	後鳥羽院五百五十回忌御法楽。題「水郷春曙」。 ⁴³ 同日に「水無瀬」へ題「早春河」の御製 ⁴⁴ あり。2・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。3・22 水無瀬。3・25 聖廟。題「杜月」の御製 ⁴⁵ あり。4・22 水無瀬。4・25 聖廟。5・22 水無瀬。5・25 聖廟。	（50）この御所千度参りについては、藤田覚氏「国政に対する朝廷の存在」（辻達也氏編『日本の近世』 ⁴⁶ 〔天皇と将軍〕所収三〇八—三一四頁）に詳述されているが、幕府が民衆を救済してくれなかつたので朝廷へ千度参りという形で直訴したのである。これに対して仙洞御所様 ⁴⁷ 後桜町上皇が暑さを癒すのにふさわしい、酸味の強い小りんごを配られたというもの。用意した三万個は昼過ぎにはもうなくなつたという。この様子は、京都の住人が江戸の人々に書き送った手紙により知ることが出来るが、それは『落葉集』（国立公文書館内閣文庫所蔵）に収められているという（藤田氏前掲三〇八—九頁）。
	※5・6月、全国的に打ちこわし起る。京都では6月初旬から御所千度参りが一ヵ月間ほど続く。		（48）『列聖』に「春きぬとこほりながれて水無瀬川ゆくせの波の音ものどけし」とある。
6・7頃、京都や近在より多勢が御所へ千度参りして来る。			（49）『列聖』に「くもらじな世々にあまねく仰ぐこの北野の森の月のひかりは」とある。
その人々へ上皇より「信心にて參詣」しているからと「りんご」三万が用意され、一人に一つあて下される。また暑い時もあるので、禁裡より四方の溝さらえが行われ、御泉水より水を流し出されたともいう。飢餓はピークに達し、その救済を御所に求めて來たが、これは神仏への祈願と同じものとみなされた。 ⁵⁰ 6・22 水無瀬。同・25 聖廟。7・7 禁			もちろん『新古今和歌集』卷第一春歌上に載つてゐる後鳥羽院の代表的秀歌「見渡せば山もと霞むみなせ川夕べは秋と何思ひけん」を踏まえて詠まれたものである。後鳥羽院五百五十回忌の法楽和歌としてふさわしい御製である。

(54) (53) (51) (52) 前掲藤田氏三二頁。
『列聖』に「七夕絲」と題して「たなばたに手繭の糸のすゑ長きためしを契れ君が代の秋」がある。

初子の日としの始のをりにあひつゝ」がある。

『公卿補任』第五篇（新附『国史大系』）天明八年

安永 九
二七八〇・41

※11・11 諒闇終大祓。12・4 光格天皇（10歳）即位。
 12・7 典仁親王（天皇実父）に一品宣下。12・13 欣子（先帝女二宮）に内親王宣下。即位定上卿及びご元服習禮参仕を「院執事」藤原（鷹司）輔平が勤仕す。欣子内親王の勅別當に「院執權」源（久我）信通がなる。

安永 十
二七八一・42

※正・1 天皇（11歳）御元服。加冠太政大臣尚実、理髮左大臣輔平なり。

正・18 御会始。2・22 水無瀬宮御法樂（以下「水無瀬」と略す）。同・25 聖廟（北野宮）御法樂（以下「聖廟」と略す）。3

・18 神影供。月次御会。同・22 水無瀬。同・25 聖廟。

※4・2 代始に依り天明元年と改元す。

天明元
二七八二・42 同・22 水無瀬。同・25 聖廟。5・22 水無瀬。同・25 聖廟。⑤・22 水無瀬。同・25 聖廟。6・22 水無瀬。同・25 聖廟。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。同・25 聖廟。9・13 「翫月」⁽³⁵⁾と題する御製あり。10・25 聖廟。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。同・25 聖廟。

天明二
二七八三・43 同・22 水無瀬。同・25 聖廟。5・22 水無瀬。同・25 聖廟。6・22 水無瀬。同・25 聖廟。7・25 聖廟。8・22 水無瀬。同・25 聖廟。9・13 「翫月」⁽³⁵⁾と題する御製あり。10・25 聖廟。11・25 聖廟。12・22 水無瀬。同・25 聖廟。

※この年、朝廷は幕府に対し、天皇の父典仁親王へ太上天皇の尊号奉呈を承認するよう要求する。

※正・28 内裏和歌御会。

天明三
二七八四・44 同・22 水無瀬。同・25 聖廟。3・18 神影供。月次御会。同・22 水無瀬。同・25 聖廟。4・22 水無瀬。同・25 聖廟。5・22 水無瀬。同・25 聖廟。6・22 水無瀬。同・22 水無瀬。同・25 聖廟。7・22 水無瀬。同・25 聖廟。8・22 水無瀬。同

(37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) このような写経をなさつておられる。
 (37) 京都市『京都の歴史』第十卷、索引年表(6)天明二年頃。三七九頁。
 (38) 内裏和歌御会に出された院の御製は、「松有歡声」と題された「ゆたかなる世の楽しみを松にふく風のこゑにもまづしらすらし」である。また「花漸盛」の御製一首もあった。
 (39) 『列聖』に「寄笛戀」と題した「ひとはただだに聞くらし笛竹に思のふしをこめて吹くとも」がある。
 (40) 前掲『京都の歴史』第十卷、三八〇頁。
 (41) 『列聖』に「月日へしげる中には花を見むおひさきしるき春のわかくさ」がある。
 (42) 『列聖』には「九月仙洞御庭の紅葉につけて九条尚實につかはしける⁽⁴²⁾」という詞書で「染そはば木蔭をとへとひと枝をまづ見せそむる庭の紅葉ば」がある。太政大臣尚實は、光格天皇ご元服のさいの加冠をつとめた人物である。
 (43) 注(40)に同じ。
 (44) 前年（天明五年）は『列聖』は欠けており、この年はまた「霞添山氣色」という題でこの一首「捲きあぐる小簾の外山のあさ霞げに春なれやむかふのどけさ」しかみえない。
 (45) 『列聖』に「いつしかと雪もとけつ、花の木の色香またる、春はきにけり」とある。
 (46) 『列聖』に「鶯の鳴く音のどけし御園生にももよろこびのはるを告げつ、」がある。
 (47) 『列聖』に「水無瀬がはその山本の霞にもしのぶむかしのはるのあけぼの」とあるが、これは、

光、寺家に仰す。10・15 伊勢一社奉幣使を発遣す。
 10・19 七社七寺へ御惱御祈、宮中不動法も行う。
 10・8 上皇、同じく御祈として十一面觀音法を大覺寺で行われる。

※10・21 また、比叡山千日（回峯）行者を召して御加持を行わしめる（これ新儀）。10・22 今夜から三夜、内侍所御神樂を行う。（これ「嘉吉の例」による）。10・25 御惱が増したので、今日から七日間、白龍法を泉殿（御納涼所）に行う。

10・27 院、恭礼門院等と内裏に幸し、暫くして俱に還幸。
 ※10・28 御惱危急となる。10・29 今晚から常御所源氏八景絵間において天皇大漸となる。しかるに、御継続未定なので秘密にさる（今春、誕生の皇女のほか皇子なし）。11・6 武家に仰せて、安永三年遠流者を召返せしむ。11・8 関白尚実、詔を伝えて云うに、御惱大漸、皇統は皇女一人ゆえ、太宰帥典仁親王息（9歳、祐宮）を御養子（准后維子を養母）として践祚あるべしと。祐宮、帥親王家より参内。夜御殿より劔璽を小御所に移す。11・9 今晩、天皇（22歳）崩御。実は去月二十九日に崩御。御惱は疳勞（ひかん）により、御腹が張り、水腫等あり。天下涼闇。11・13 祐宮の初名師仁を兼仁とする。11・25 兼仁（9歳）践祚。11・26 先帝の追号を後桃園院とする。12・10 先帝を泉涌寺に葬り奉る。12・14 先帝初七日、御經供養を般舟三昧院にて行う。

(33) 『列聖』には、安永九年の詠は一首もない。し

かし、安永十年（天明元年）から、天明二年、天明五年、（同六年は一首のみ）、（寛政二年も一首のみ）まで、後桜町上皇の御製がみられる。今後年譜の中でことわらないものはすべて「院」での歌会である。

以下、年譜の史料は、ほとんどないので、この『列聖』に掲げられた御歌会の開催を中心記載していく。御製も、上皇のお気持や行事に関連するもの、うちの何首かを記すこととする。なお、この宮中での法楽御会については、古相正美氏『堂上和歌と神道・仏教との関係』（『近世堂上和歌論集』所収、明治書院刊、四五〇～五〇頁）を参照されたい。

この「寄民祝國」と題された「民やすきこの日の本の國の風なほただしかれ御代のはつはる」という後桜町上皇の御製は、前年十二月四日即位された光格天皇（11歳）へのお気持をこめてのものである。

『列聖』には「山家友」と題した「たれとふと待つこともなき山住はおなじ心のともぞしたしき」がある。

(34) 『列聖』に「言の葉のいく世もつもれ日の本にもてはやす名もなが月の影」とある。

(35) 『列聖』に「山家友」と題した「たれとふと待つこともなき山住はおなじ心のともぞしたしき」がある。

(36) 『宸翰英華』（三）五〇一～二頁「一一七二宸筆般若心經一卷」（青蓮院藏）。後桜町天皇は、明和八年から文化九年まで四十二年間にわたって、毎年二、三回、父帝や弟君桃園帝の菩提のために、

安永
八
(二七七九)
40

いで方違により父准后前関白内前の今出川第へ退出。
翌日、中筋の里殿に渡る。

※正・11 神宮奏事始、天皇の御惱のため俄に延引。
同・12 賀茂奏事始もまた延引と。

正・18 院和歌御会始あり。題「鶯花契万春」(右少将雅威朝臣献題)。

※正・24 内裏で和歌御会始あり。題「池岸有松鶴」(右少将雅威朝臣献題)。

正・24 この日、女御維子、中筋里第で第一皇女を出産。女一宮と号す。産養の事、寛永以来、沙汰に及ぼす。上皇の御夢²⁹により、世間では皇子誕生と謳歌す。

※2・16 准后前関白(内前)家和歌会始あり。題「竹有佳色」。御製(この度は、天皇はなく院のみ賜う)。読師

は第主の准后内前。前大納言紀光は出詠のみで不参会。

2・25 女御維子、女一宮を伴い里殿より内裏に還入。

3・18 院において柿本神影供和歌御会³⁰あり。題「毎春花芳」(右少将雅威朝臣献題)。3・20 院より古今和歌集口伝を入道前大納言光胤(ト山)に伝え賜う。3・26 院において和歌當座御会³¹あり。二首題「春松、春鶴」(懷帝なり)。

※5・22 内裏當座御会³²あり。

6・3 女御從三位藤原維子に准三宮宣下あり。7・7 内裏和歌御会あり。題は「七夕夜涼」(右衛門督為章献題)。8・23 今日より七日間、御祈を七社七寺に行う。実は、六月以来の天皇御惱を秘す。10・8 天皇御惱祈願を今日から七日間法隆寺薬師堂で行う。紀

(28) 読師は民部卿隆前、講師は右少将雅威朝臣、講頌は持明院前宰相宗時(发声)、奉行は冷静前中納言為泰。『列聖』には安永八年は次の一首のみの記載である。すなわち、「よろづ代と梅にもちぎれこの春のも、よろこびを告ぐる鶯」である。

(29) そもそも去る十二月廿六日の上皇の御夢によると、文徳天皇の皇子惟喬親王が女御維子の胎内に宿つた。そこで女房をもつて密かに御使を彼の皇子(丹波に在るという)へ立てたという。世間では皇子たるべしと、謳歌した。しかるに、「為皇女、於御縫體者不想像尤奇矣」と記している。

(30) 読師は前源大納言重熙、講師は藏人右少弁俊親、講頌は按察使有美(发声)、奉行は權中納言公明。

(31) この会は、院より光胤に、今月二十日、古今集を伝授されての故に開かれたと割注ある。この日の読師は廣橋大納言伊光、講師は右少将雅威朝臣で、奉行は權中納言公明。

(32) 『宸翰英華』(二)五一六頁に、後桃園天皇の御製として「一一八六宸筆御短冊」(東山御文庫蔵)がある。「苗代」と題された「ときぬとたねまきそめますらおがしみ引きまつる小田のなはしろ」である。これは、「別に御詠草があつて、後桜町上皇の御添削がある」(同書五一七頁)といふ。『列聖全集』第十一卷の「後桃園天皇御製」八首中には入っていない御製である。ともかく崩御六カ月程前のことである。後桜町天皇は、このように天皇のお歌の添削などもされたことがわかる。

正・18 院和歌御会始あり。題「每^レ山有^レ春」(冷泉前中納言
為泰、献題)。⁽²⁶⁾

正・26 内裏で和歌當座御会あり。講師は篤長、奉行は為泰、
紀光、参仕し詠進す。この日院、内裏に幸し、晩に還御。

※2・8 准后近衛内前、関白太政大臣氏長者内覽等を

罷む(去年十一月十六日申請うところ)。この日、左大臣九

条尚美に關白氏長者内覽牛車兵仗等の宣下あり。2・

16 准后前閑白(内前)家和歌会始なり。題「柳絲隨^レ
風」(右少将雅威、出題)。今年また、天皇と上皇等の御製
を賜う。昨年は院のみなり。御製読師は第主の内前で
ある。紀光も参会し出詠。

3・18 院において柿本神影供和歌御会あり。題「寄^レ神祝」⁽²⁷⁾
(右少将雅威朝臣献題)。5・25 院より和歌手仁遠波口伝を風
早前宰相公雅に伝え賜う。

※6・19 内裏小御所において和歌當座御会(組題、短
冊)あり。奉行、權大納言紀光、上皇、内裏に幸し、
晩に還幸。

※7・2 大雨、洛中大水。7・11 淀川洪水。

⑦・25 院より更に三部抄・伊勢物語等口伝を入道前大納言
鳥丸光胤(法名ト山)に伝え賜う。

※9・9 内裏和歌御会あり。題「菊粧如^レ錦」(飛鳥井前
大納言雅重献題)。奉行、右衛門督為章。

11・3 院より伊勢物語口伝を大宰帥典仁親王、三部抄口伝
を中務卿織仁親王(父職仁親王は院の師範)等へ伝え賜う。

※11・24 女御維子、禁裏北殿(曹子なり)にて着帶。次

讀師は廣橋大納言伊光、講師は藏人頭右中弁篤
長朝臣、講頌は飛鳥井前大納言雅重(发声)、奉行
は權中納言公明。『列聖』には、「たますだれあくる日ごとに春の色のみどり
を添へて霞む山々」とある。

長朝臣、講頌は飛鳥井前大納言雅重(发声)、奉行
は權中納言公明。『列聖』には、「世々たえず榮を
まもるこの神のめぐみかしこく仰ぐことの葉」と
ある。

安永 六
一七七・三八

定つた董子女王（故一品職仁親王の女「泰宮」）に従三位の宣下あり。上卿、民部卿隆前。

※12・25 この日、一位前権大納言兼胤、大臣に准じ、朝参に預るの由、宣下あり。
今年、天皇（19歳）御厄年のため近臣等、因幡薬師に詣ず。恒の如くである。

正・18 院和歌御会始あり。題「初春見鶴」（飛鳥井前大納言雅重献題）。

※正・24 和歌御会始あり。題「風光日々新」（冷泉三位為章獻題）。

2・16 関白（内前）家和歌会始あり。題「毎年観梅」（冷泉前中納言為泰献題）。今年は院の御製のみ賜つたという。3・18 院で柿本神影供和歌御会あり。題「花有榮色」（飛鳥井前大納言雅重献題）。6・10 今夕、俄かに院において内鞠あり（密儀）。上皇、垂簾にて御覽あり。6・28 院御所で清二位宣條、論語を講ず。

※7・7 内裏で和歌御会あり。題「星河秋興」（飛鳥井雅重献題）奉行、冷泉為泰、権大納言紀光詠進す。9・9 内裏で和歌御会あり。題「白菊戴露」（右少将雅威朝臣献題）奉行、飛鳥井雅重。紀光詠進す。

11・24 徒三位董子女王（泰宮）故一品職仁親王の女。日ごろ、仙洞御所に召し貰かる。院御所より左大将師久第（関白内前の今出川第の北方に坐す）に移徙。上達部廣橋大納言伊光以下五人扈從、今夜嫁娶あり（密儀）。

※12・18 関白太政大臣内前に准三宮の宣下あり。

(23) 読師は源大納言信通、講師は巖人頭右大弁經逸

朝臣、講頌は持明院前宰相宗時（发声）、奉行は新大納言伊光で、権大納言紀光も詠進する。『列聖』には、「このほらに千年の春もわが友とちぎりかさねむ鶴のけごろも」とある。「ほら」は仙洞をいう。

(24) 昨年から行われたものである。読師は権中納言

紀光、講師は左少将隆久朝臣、講頌は按察使有美（发声）、御製読師は第主関白内前であり、同じく講師は右宰相中将冬泰。なお、今年は院の御製のみを賜り天皇のはなかつた。奉行は、殿上家司の左少将公理朝臣。

(25) 読師は飛鳥井前大納言雅重で、講師は右中将為敦朝臣、講頌は清水谷前大納言実榮（发声）、奉行は冷泉前中納言為泰。『列聖』には、「神のたむけ言葉の種と咲きまさる花は世に似ぬ色を添ふらむ」とある。

安永
五
〔七七六・³⁷〕

正・7 院、内裏に幸す。夜に還御。正・18 この夜、弘御所で院の和歌御会始なり。題「竹添春色」。

※正・24 和歌御会始あり。題「心静酌春酒」(冷泉前中納言為泰献題)。

安永
五
〔七七六・³⁷〕

正・26 和歌當座御会あり。組題、短冊なり。奉行、權大納言紀光。院、内裏に御幸され、御製があつたという。夜に還幸。

2・10 院で和歌當座御会あり。奉行、冷泉前中納言為泰。
2・16 関白内前家和歌会始あり。題「池水久澄」。天皇および院の御製を賜る。2・22 水無瀬宮和歌御法楽あり。恒の如くで院もまた同じといふ。ただし御製なしというがこれは違例である。

2・25 北野宮和歌御法楽あり。奉行、權大納言紀光。

3・6 この頃、世間麻疹大流行。諸国また同じ。4・18 天皇(19歳)四五日御惱、麻疹の由、医師が定む。この当時、上達部以下この病にかかつた者、およそ七、八十人といふ。4・29 天皇、麻疹後、始めて御湯を供さる。6・25 昨日より、天皇また、御惱。麻疹の余毒、発すといふ。7・1 御惱日をおつて減ず。7・7 和歌御会あり。題「七夕天象」。9・9 和歌御会あり。題「籬菊露芳」。

10・9 内侍所庭上において五常樂千反あり。これ上皇御惱平癒御願といふ。11・8 院の御媒介により左少将師久室と

※(12)・15 節分により今夕、豆を以て鬼の目を打つ、恒の如し。

(19) この日のご伝授について「宸筆御記」同日条に「一主上天仁遠波御〔伝授〕でんじゅ、今日モ御す、まいる。……一御小座敷にて御でんじゅの事するくとすみまいらせ、歌道はん築、めで度しめで度し。……」(『宸翰英華』(二)、四八一頁)とある。

(20) 講師は藏人頭右大弁資矩朝臣、奉行は權中納言紀光。このとき、上皇も詠まれたのであり、「列聖」には「早春梅〔六月二十五日〕聖廟御法楽」として「かみがきに春をやつげて梅の花まづ咲きそめて香に匂ふなり」とある。

(21) 読師は飛鳥井前大納言雅重、講師は藏人頭右大弁經逸朝臣、講頌は持明院前宰相宗時(発声)、奉行は冷泉前中納言為泰。權大納言紀光も詠進す。安永五年のこの年、「列聖」の方は欠けている。

(22) これは「自今年可催旨、兼日自内院被仰故云」と割注があり、天皇および院より今年から関白家で和歌会を行うよう云われて始まつたものである。読師には徳大寺大納言実祖、講師には左中弁謙光朝臣、講頌には持明院前宰相宗時(発声)、そして御製読師は亭主即ち関白内前である。さらに同講師には右宰相中将実古、奉行家司には左少将隆久朝臣で權大納言紀光も參会し詠を出している。

し詠進。

※2・24 月次和歌御会あり。組題、短冊。奉行、權中

納言紀光。3・13 天皇御座を糸桜の下に設け、和歌

當座御会あり。

「風靜花開」(冷泉三位為章獻題)。

※3・24 天皇(18歳)御拭黛あり。院、青綺門院、恭
札門院等内裏に幸す。夜に俱に還幸。4・5 御学問
所で和歌當座御会あり。奉行、權中納言紀光。

5・17 上皇、内裏に幸し、御小座敷で天皇(18歳)に、和
歌手に遠波を受け奉り⁽¹⁹⁾、しばらくして還幸。

※6・1 御伝受後、小御所で、和歌當座御会あり。二

首題「名所氷室」「松色久綠」(懷持。飛鳥井前大納言雅重
獻題)。同日、鴨川洪水。下鴨南堤百餘間潰流。6・25

記録所において、北野宮和歌御法樂あり。7・7

和歌御会あり。題「七夕船」(冷泉三位為章獻題)、奉行、
權中納言紀光。8・13 内裏御小座敷で和歌當座御会

(密儀)あり。奉行權中納言紀光。桜町院御宇、此所
において御会を催される例と云う。8・15 淀川洪水。

9・9 和歌御会あり。題「菊有延年色」(冷泉中納
言為泰獻題)。奉行、權中納言益房。權中納言紀光詠進

す。

11・7 今夜、院御所の桜町殿鎮守社正遷宮。11・30 院よ
り御製和歌二首を一位廣橋大納言兼胤に賜う。此日、奏慶に
よると云う。

幾久しくよろしく頼入候、歌道はん榮祝忝ねが
い存じ候、めで度かしく、

關白殿

内々御披見

有栖川宮職仁親王から受けられたこの伝授を「こ
に内前に「とゞこほりなくする／＼と相伝」され、
そのご満悦をご消息としておくられたのである。
「する／＼とつた／＼、忝さ筆紙にも、言葉にも申
つくされず候う」そして「なを／＼幾久しく歌道
はん榮いはる願入候」と歌道の興隆を願つておら
れる。また「する／＼と相伝」できたのは「神の
御ぐみ第一」とされている。さらに内前に「此道
に御心をそへられ候、萬事たのみ入候」と重ねて
頼んでおられる。後桜町上皇の歌道に対する御心
情がうかがえる消息文である。

(16) 読師は葉室前大納言頼要、講師は藏人頭左大弁

光祖朝臣。講頌は無く、奉行は廣橋中納言伊光。『列
聖』に「瞿麥露」という題で「ちぢの数ことばの
露をかけて猶はなもてはやす大和なでし子」「寄
鶴祝」では「千代のこゑさら添へつつ今よりの
榮もするき和歌の浦づる」とある。

(17) 読師は西園寺大納言賞季、講師は藏人頭左中弁
資矩朝臣、講頌は清水谷前大納言実榮(発声)、奉
行は別當公明。

(18) 読師は清水谷前大納言実榮、講師は藏人左大弁
光祖朝臣、講頌は持明院宰相宗時(発声)、奉行は
廣橋中納言伊光。『列聖』に「にほひのみたえず
さそひて盛なる花にいとはぬ風ぞのどけき」とあ
る。

安永
四
三七五五
36

- 23 院中御仏事、第三日結願なり。御經供養あり。⁽¹⁴⁾ 5・14 院、関白近衛内前に古今和歌集口伝を伝え賜う。(次いで、九月十一日に歌道の極秘たる灌頂上一事も無事に伝えらる。)これについて院よりご満悦の関白への御消息がある。⁽¹⁵⁾ 6・9 院(桜町殿)で、和歌當座御会あり。二首題「瞿麥露」、「寄^レ鶴祝⁽¹⁶⁾懷^レ」なり。
- ※6・19 天皇(17歳)の御前において投扇戯あり。関白内前以下参仕。日頃、この戯、世間で流行という。7・6 桜町殿の御簾の外で投扇戯あり。関白内前、上達部など参仕。
- ※7・7 和歌御会。題「水邊望天河」。
- 10・6 院の御所桜町殿で、紅葉御覽あり。権中納言紀光参入す。
- ※11・24 月次和歌御会あり。三首題「浦千鳥、雪散^レ風、寄^レ冬戀、懷紙」奉行、権中納言紀光。⁽¹⁷⁾ 12・1 御学問所で和歌當座御会あり。組題^{短冊}奉行、権中納言紀光。
- 正・9 院、兩女院(青綺門院、恭礼門院)等内裏に幸す。しばらくして各々還御。正・18 院和歌御会始⁽¹⁸⁾あり。題「瀧音知^レ春」(冷泉三位為草獻題)。
- ※正・24 和歌御会始、題「春風解^レ冰」。正・26 和歌當座御会あり。権中納言紀光参仕し、詠進。此日、院、内裏に幸し、暮に還御。
- 2・1 院(御簾の外)で小弓あり。関白内前、権中納言紀光已下三人祇候す。密儀。組題二十首。権中納言紀光、参仕

院中御仏事、第三日結願なり。御經供養あり。⁽¹⁴⁾ 5・14 院、関白近衛内前に古今和歌集口伝を伝え賜う。(次いで、九月十一日に歌道の極秘たる灌頂上一事も無事に伝えらる。)これについて院よりご満悦の関白への御消息がある。⁽¹⁵⁾ 6・9 院(桜町殿)で、和歌當座御会あり。二首題「瞿麥露」、「寄^レ鶴祝⁽¹⁶⁾懷^レ」なり。

※6・19 天皇(17歳)の御前において投扇戯あり。関白内前以下参仕。日頃、この戯、世間で流行という。7・6 桜町殿の御簾の外で投扇戯あり。関白内前、上達部など参仕。

※7・7 和歌御会。題「水邊望天河」。

10・6 院の御所桜町殿で、紅葉御覽あり。権中納言紀光参入す。

※11・24 月次和歌御会あり。三首題「浦千鳥、雪散^レ風、寄^レ冬戀、懷紙」奉行、権中納言紀光。⁽¹⁷⁾ 12・1 御学問所で和歌當座御会あり。組題^{短冊}奉行、権中納言紀光。

正・9 院、兩女院(青綺門院、恭礼門院)等内裏に幸す。しばらくして各々還御。正・18 院和歌御会始⁽¹⁸⁾あり。題「瀧音知^レ春」(冷泉三位為草獻題)。

※正・24 和歌御会始、題「春風解^レ冰」。正・26 和歌當座御会あり。権中納言紀光参仕し、詠進。此日、院、内裏に幸し、暮に還御。

2・1 院(御簾の外)で小弓あり。関白内前、権中納言紀光已下三人祇候す。密儀。組題二十首。権中納言紀光、参仕

(14) 柳原紀光は、宸筆の御經か詳かでないと注記し、「享保宸筆也」といっている。すなわち、中御門天皇の御筆であったことがわかる。

(15) 『宸翰英華』(三)に「一一七五宸筆御消息」(東山御文庫藏)へ五〇四(五頁)としてある。

めで度さ悦かぎりなくぞんじつゞけ候まゝ、一寸と書附御めにかけ候、御覽ののち返し給べく候、當夏古今集の事するくとつたへ、忝^レさ筆紙にも、言葉にも申つくされず候うへ、今一事をと存居候に、是またするくと何殘る事なくつたへまいらせ、安心忝^レさ、有がたさ、申様もなく候、なをく幾ひさしく、ひとしほずい分く御氣丈にて、御つたへども有之候様、主上にも御傳じゆの御さた共あらせられ、なをく幾久しく歌道はん榮いはゐ願入候、明和のはじめ智子存じよらずも宮よりつたへ給候ころも、忝^レさ身にあまり、おそれく有がたくぞんじ居候所、その後五とせ、六とせ以來は、朝暮此事心にかゝり、何とぞしゆびよくめうがにかない、するくと傳へ度さ、ま事に常々有がたき事、面白き事、時にふれ候事、用事等の時は、それに心うつり候へ共、内心には、深く此事大事とするくと傳へ度さ、ま事に常々有がたき事、面白き事、時にふれ候事、用事等の時は、それ神の御めぐみ第一、萬々忝^レ御事、申のべつくされず候、此うへは猶々そなたへ頼入候まゝ、よくく此道に御心をそへられ候、萬事たのみ入候、猶また申度事は、おいく申すべく候、御用多中ゆへ、御用すきくには心をばなくさめ、

安永
三
(二七七四・35)

題「鶯是萬春友」(新三位為章 出題)。2・3 内裏和歌當座御会あり。院、内裏に幸す。すぐに還幸。

2・5 院で和歌當座御会あり。題「若菜」⁽¹⁰⁾【列聖】。3・18

院御所の桜町殿で柿本神影供和歌御会あり。題「松添 春色」。

※3・19 天皇(16歳)、女御維子(15歳)曹司の北殿に

渡御し、花を御覽になる。3・23 天皇、両三日御惱

あり(御疱瘡)⁽³⁾。3・13 女御維子の疱瘡治定す。4・

30 天皇、このごろ御脚の病あり。御祈を所々に仰す
(密儀)。

7・7 内裏和歌御会あり。題「鳥鵠成橋」(冷泉前中納言為泰が獻題)。9・9 内裏和歌御会あり。題「菊花久馥」

(侍従雅威が獻題)。奉行は冷泉前中納言為泰。

11・26 今日から三日間、上皇御慎あり。前大僧正 圓滿院

祐常(三条前関白吉忠の男、院の御舅)薨する故なり。

正・18 院和歌御会始め。題「寄巖祝言」(侍従雅威獻題)

※正・24 内裏和歌御会始め、題「雪消山色靜」(冷泉前中納言為泰獻題) 同・26 内裏和歌當座御会(今年初度)なり。

2・6 院で和歌當座御会始め。奉行は別當公明。3・17

禁庭の桜、半分より折れ、このごろ桜町殿の松も根より倒れる。3・23 上皇の御惱平癒。3・24 女御維子、始めて院に参らる。4・18 雨により小御所で舞楽を合奏。院及び両女院等、内裏に幸す。晩に各々還幸す。

4・21 桜町院廿五回聖忌(御忌廿三日)。今日より三日間、御仏事を桜町殿(院御所の小御所を道場とす)で行われる。4・

(8) 読師は姉小路前人納言公文、講師は藏人頭左中

弁資矩朝臣、講頌は鷺尾前大納言隆熙(发声)、奉行は正親町中納言公明。【列聖】に「正月二十八

日御会始」として「萬年さかゆる御代のことぶきをここにも告ぐる春のうぐひす」とあり、新しい御代の永く統くことを詠まれている。

(9) 講師は右少将為敦朝臣、奉行は飛鳥井前大納言

聖には「若菜」⁽¹¹⁾とみえ、「おもふどちた

れも心のはるる野に千代の春しる若菜をぞ摘む」とある。講師は藏人頭左大弁光祖朝臣。奉行は日野中納言資枝。

(10) 【続史愚抄】は、この日の題を記さないが、【列

聖】には「若菜」⁽¹²⁾とみえ、「おもふどちた

日たむけつきせぬ松のことの葉」とある。読師は民部卿隆前、講師は藏人頭左大弁光祖朝臣、講頌は按察使有美(发声)、奉行は日野中納言資枝。【列聖】に「色ぞそふ春もいくとせ神に今

讀師は右大將前豊(御懐紙を賜う)、講師は藏人頭右中弁謙光、講頌は按察使有美(发声)、奉行は廣橋中納言伊光。【列聖】に「洞の中のいはほの苔のいく千代とおひそかる松も契かさねむ」とあ

る。

(13) 【列聖】に「早春鶯」として「はる来ぬとわれに告げてや此のほらの松になれきて鶯のなく」とある。

安永 元 <small>(二七七・ 33)</small>	3・6 院で和歌當座御会あり。3・18 院（桜町殿）で柿本神影供和歌御会あり。題は「花有歛色」（飛鳥井大納言雅重献題）。3・25 院で北野宮和歌御法樂あり（短冊）。4・23 父帝桜町天皇二十二回の聖忌に当たり、その菩提の為に六字名号を書写された。
	※4・28 天皇（14歳）、紫宸殿で即位礼を行われる。
安永 二 <small>(二七七・ 34)</small>	5・3 仙洞桜町殿北園で田植の興あり。
	※5・19 天皇、昼御座で『後漢書』明帝紀の御書始あり。
正・1 院、（桜町殿で）拝礼あり。正・9 院、内裏に幸す。	5・25 院で北野宮和歌御法樂あり（密儀）。講師は左大弁紀光。6・1 大宮藤原富子（29歳。5・9 皇太后に冊立）、桜町殿に行啓。公卿殿上人は供奉せず（密儀）。夜に還宮。
	※7・9 皇太后富子に恭礼門院の号を賜う（落飭）。8・7 摂政内前の女維子（13歳）の入内を来年冬と治定。
正・18 院和歌御会始。題「伴松齡久」（飛鳥井大納言雅重が出題）。正・26 内裏和歌當座御会あり。院、内裏に幸す。	10・8 院、恭礼門院の御所に幸す（初度、密儀）。しばらくして還御。
	※10・29 大嘗祭の御禊あり。
正・9 院、女院（青綺門院）、新女院（恭礼門院）等、内裏に幸す。しばらくして各々還御。正・18 院和歌御会始あり。	（7） 読師は葉室前大納言頼要、講師は左少将為章朝臣、講師は飛鳥井大納言雅重（发声）。奉行は左衛門督為泰。『列聖』に「この洞にいくとせ馴れてともなはむ契ひさしき春のまつが枝」とある。ただし、題名は「伴松榮久」となっており、『続史愚抄』の「齡」がここでは「榮」の字になつてゐる。

(4) (3) 講師は藏人左中弁光祖、奉行は左衛門督為泰。
読師は權大納言兼胤、講師は左少將為章朝臣、
講師は飛鳥井大納言雅重、奉行は庭田前大納言重熙。

(5) この「法樂」とは奉納をいう。藏人頭左大弁紀光が講ず。奉行は左衛門督為泰である。

(6) その「御奥書」に御製「今も世にあらばとさらされたふぞよめぐみの露のかずくにして」を記される『宸翰英華』（二五〇頁）『二十七三宸筆阿彌陀佛名号』（青蓮院藏）。なお、上皇は、明和八年のこの年から天明七年（一七八七）までの十七年間、年二回（三回）、御父君（桜町天皇）と先帝（弟君・桃園天皇）の菩提のために六字名号を書写されたという（同書五〇二頁）。

年号	主な関係事項
明和七 〔三七〇〕 31	正・23 幕府、藤堂高悠と鍋島直愈に仙洞御所造営の助役を命じる。翌月より造営開始〔徳川実紀〕。3・28 御譲位後の仙洞御所となる桜町院旧地「桜町殿」の木作始め。9・28 桜町殿棟上げ。10・13 御譲位は、来月廿四日と定む。
明和八 〔三七一〕 32	15 摂政近衛内前が藏人頭左大弁紀光を介して太政大臣の辞任を請う。去年も去々年も申請を許されず。今回も重ねて慰留の旨を仰せられた。そのさい後桜町天皇より内前に賜つた御製一首がある。11・24 天皇、土御門里内裏で皇太子英仁親王に譲位。
明和八 〔三七二〕 32	旧主（院）は北殿（仮仙洞）に渡御。 ※11・24 土御門里内で皇太子 ¹ 後桃園天皇（13）受禅。前太政大臣近衛内前、元の如く摂政となる。
明和八 〔三七三〕 32	正・11・24 院御所で院司を補し、右大臣輔平を執事となす。 正・11・24 院御所で院司を補し、右大臣輔平を執事となす。 正・18 三十六歌仙絵を桜町殿鎮守拝殿に幸す。2・16 院、禁裏北殿（仮仙洞）より移徙して桜町新仙洞に幸す。2・1 桜町殿にある鎮守御社に、院の御幣あり。2・16 院、脱履後初めて内裏に幸す。「御幸始儀」として車轎を用いられる（密儀）。公卿右大臣（輔平）以下十一人、藏人頭左大弁紀光以下十六人が供奉する。しばらくして還幸。2・18 院で和歌御会始め。題「泉石有佳趣」。2・27 内裏和歌当座御会あり。この日、院、内裏に幸す（密儀）。しばらくして還幸。
※3・4 天皇（14）、毎日御拝を始められ、石灰壇に出御。藏人頭左大弁紀光、御直衣の裾を取る。	

(1)

『宸翰英華』（第二冊）一二七〇「宸筆詠草」（陽明文庫藏）所収の「をろかなるわれをたすけのまつりごとなをもかはらずたのもとをしれ」には、天皇が内前をいかに頼りとされていたか示されている。

(2)

この明和八年は『列聖全集』所収の「後桜町天皇御製」（以下略称「列聖」）には一首も入っていない。この日の読師は右大将（輔忠）、講師は藏人左中弁光祖、講頌庭田前大納言（重熙、发声、奉行を兼ねる）、御製読師は右大臣（輔平）、同講師柳筍中納言（隆望）、藏人頭左大弁紀光が詠進、と『続史愚抄』にみえる。「御製読師」の右大臣輔平は「院執事」でもあるから、院の御製があつたとみられる。

注

百首を越す御製和歌は、幸い『列聖全集』「御製集」第十一卷（『皇室文学大系』第三輯）に活字化されているが、立ち入った研究は見あたらない。

ちなみに、『近世堂上和歌論集』（明治書院刊、一九八九）および鈴木健一氏著『近世堂上歌壇の研究』（汲古書院刊、一九九二）などでは、江戸前期の後陽成院・後水尾院・靈元院が中心に扱われている。しかしながら、江戸後期の桜町院・後桃園院そして後桜町院には、ほとんど言及されていない。そこで私は、今後この後桜町女帝の御製和歌を通して、天皇のご事績を明らかにしたいと考えている。そのためには、基礎作業として年譜を作成することにした。ご在位中については、別稿（京都女子大学史学会『史窓』第58号）に発表したので、本稿にはご譲位後の年譜を掲載させて頂きたい。

前稿と同様、『列聖全集』の「御製集」第十一卷「後桜町天皇御製」および『宸翰英華』（第二冊）、そして後桃園天皇崩御までは、柳原紀光の『続史愚抄』（新訂増補国史大系15）の記事を主に用いた。年譜事項のうち、説明を要する部分については注に略記する。

なお、『続史愚抄』の編者柳原紀光（もと光房）は、紀伝道を家学とする柳原家に生まれた。父は権大納言光綱、母は近江守織田信休の女郁子である。明和五年（一七六八）従四位上蔵人頭、以後累進して参議、正三位権大納言、正二位となる。その間、桃園・後桜町・後桃園・光格天皇の四朝に仕え、順調な昇進を遂げた。それは「彼のすぐれた才

能と公事精励の結果」と「閑白近衛内前の推輓による」ものという（武部敏夫氏「続史愚抄」、吉川弘文館刊『国史大系書目解題』上巻、一八四頁）。

しかるに、安永七年（一七七八）五月、紀光は假を申さずに近江の長命寺へ参詣することを咎められ、光格天皇の勅勅を蒙る。まもなく許されたが、これを機に、自ら官途をたち、「紀伝之職」にあつた亡父光綱の志を継ぎ『国史』の編纂に力を尽くす。それから晩年までの二十余年をかけて完成したのが『続史愚抄』四十八巻である。本書には「正確な史実を求め、記事の考拠を重んずる紀光の態度」（武部氏同上、一七九頁）が貫かれており、信頼度の高い史書となされている。

凡例

一年号の左脇の丸カッコ内は、上が西暦、下が後桜町女帝の年齢を示す。

一年譜の※を冠した記事は、後桜町上皇ご自身のことではないが、関係のある重要な事項である。

一年譜の記事で少し説明を要する部分には、注番号をつけ、下欄に略記した。

特に出典を示さない記事は、すべて『続史愚抄』（新訂増補国史大系15）に拠った。また後桜町天皇御製は『列聖全集』の「御製集」第十一卷により、以下『列聖』と略称する。

一年譜中、「水無瀬宮御法楽」と「聖廟（北野宮）御法楽」は頻出するので、各々「水無瀬」「聖廟」と略称する。

後桜町上皇年譜稿

所京子

(外国语学部日本語学科)

A manuscript on the careers of
Gosakuramachi-Jōkō

Kyoko Tokoro

〈キーワード〉

後桜町天皇・最後の女帝・
堂上和歌・宸記・列聖全集

〔解説〕

わが国には歴史上、八人の女帝（二人は重祚）がおられる。そのうち、古代の六帝については、かなり研究が深められてきた。しかし、近世の二人、とりわけ最後の女帝となられた後桜町天皇に関しては、厖大な宸記（四十二巻）および一六〇〇余首にものぼる御製和歌が現存しているにもかかわらず、その事績は必ずしも明らかにされているといえない。

たとえば、『国史大辞典』第5巻（昭和60年、吉川弘文館刊）の「後桜町天皇」項（武部敏夫氏執筆）には、次のとくある。

一七四〇—一八二三 一七六二—七〇在位。元文五年

（一七四〇）八月三日桜町天皇の第二皇女として誕生。母は閔白二条吉忠の女、皇太后舎子（青綺門院）である。諱は智子（としこ）、初訓は「さとう」といふ。幼称は初め以茶（いぢ）宮、のちに紺（あけ）宮という。寛延三年（一七五〇）三月親王宣下。宝暦十二年（一七六二）七月桃園天皇の崩御に際し、儲君英仁親王（後桃園天皇）が幼少なため、その成長まで皇位を継ぐことになり、同月二十七日践祚、翌十三年十一月二十七日即位式を挙げた。ついで明和五年（一七六八）二月英仁親王を皇子に立て、同七年十一月二十四日讓位し、文化十年（一八一三）閏十一月二日七十四歳をもつて崩御。後桜町院と追号し、京都泉涌寺山内の月輪陵に葬った。天皇は資性円満明哲、漢学を好み、歌道にも長じた。また幼少の後桃園・光格二天皇が相ついで践祚したため、院中にあつて輔導の任にあたり、常に懇篤な教訓を垂れた。宝暦六年より安永九年（一七八〇）に至る宸筆の日記四十一冊が京都御所東山御文庫に伝存する。

〔参考文献〕 帝国学士院編『宸翰英華』二一

ここには、天皇ご自身が学問や歌道に励まれたこと、また後桃園・光格両天皇へのご教導に力を入れられたことが示されている。しかし字数の制約もあるうが、その詳細なご事績は未だ十分に解明されていないようと思われる。参考文献として、『宸翰英華』しか掲げられておらず、管見の限りでも単行の伝記や専論はみあたらぬ。四十一巻にのぼる宸記も、未だ翻刻すらされていないのである。千六